

性惚院 | 堕ちた人妻、快樂に溺れる |

目次

性惚院 ― 堕ちた人妻、快樂に溺れる ―

観測記録・第二段階

第一章 疼きに耐えきれず

第二章 蜜穴治療の懇願

第三章 濡のオイルマッサ―ジ

第四章 抗えない疼き

第五章 選ばされる身体

第六章 不可逆の選択

第七章 虚しい夜

第八章 戻れない夜

第九章 前提となった夜

第十章 空白の夜

神木真夜 観測総括（第二段階）

次段階予告

条件反射領域への移行予定

あとがき

本記録は、被験体 S A・O 1 の変化過程に焦点を当てた、
第二段階観測ログである。

第一段階で確認された初期反応を基に、
心理的・身体的依存の進行を優先的に記述する。

感情描写は最小限に抑え、
状態変化の推移を主軸とする。

これは物語ではなく、
客観的データ記録である。

第一章 疼きに耐えきれず

夫の腰の動きが止まった。

佐伯美咲は、暗い天井を見つめながら、静かに息を吐いた。

……また、何も感じなかった。

元々、不感症だった。

結婚して八年。

夫の優しい愛撫でも、ほとんど達したことがなかった。

5

それが普通だと思っていた。

しかし、性惚院に通い始めてから、身体が変わり始めた。

神木真夜の施術を受けた後、胸の先や秘部が敏感に反応するようになり、初めて「感じる」という感覚を知った。

なのに――

今夜の夫とのセックスは、ただの義務のように味気なかった。

夫が達した後も、美咲の身体は疼いたまま、虚しく取り残されていた。

「……はあ……」

美咲は夫の寝息を確認すると、そっとベッドを抜け出した。

バスルームのドアを閉め、鍵をかける。

薄暗い照明の下、鏡の前に立つ。

ネグリジェを滑り落とすと、鏡の中に映る自分の姿が露わになった。

6

Gカップの胸の先で、銀色のパールピアスが妖しく光っている。

敏感になった突起が、疼いていた。

美咲は震える指で、そっと自分の乳首を摘んだ。

「ん……っ、あ……」

ピアスを軽く引っ張っただけで、甘い電流が背筋を駆け上がる。

もう片方の手は、自然と股間に伸びていた。

鏡の中の自分を見つめながら、指を激しく動かす。

「……どうして、夫とでは……いけないの……？」

その言葉が、頭の中で何度も繰り返された。

罪悪感と、抑えきれない疼きが混じり合い、胸を締め付ける。

美咲は自分の秘部を弄り続けた。

水音だけが、静かなバスルームに響く。

太ももを伝う液体が、床へぽたぽたと落ちた。

何度も達した。

しかし、本当の満足は一向に訪れなかった。

ただ、身体の奥がさらに熱く疼くだけだった。

美咲は絶頂の余韻に震えながら、スマホを手を取った。

性惚院の予約画面を開き、指を震わせながらボタンを押す。

【三回目の予約 午前診】

「……また、行ってしまう」

鏡の中の自分に、彼女は小さく呟いた。

元々不感症だった身体は、今や神木真夜の施術なしではいられなくなっていた。

第二章 蜜穴治療の懇願

午前診の待合室は、いつもより静かに感じた。

佐伯美咲は、今日も午前診を選んだ。

夫には、

「まだ肩こりが残っているから」と嘘をついて家を出てきた。

(……もう、こんな嘘ばかり……)

待っている間も、胸のピアスがじんじんと疼き、下半身が熱を持っていた。

9

夫への罪悪感が胸を締め付けるのに、身体は正直に反応してしまふ。

そんな自分が、たまらなく嫌だった。

「……佐伯さん、どうぞ」

神木真夜の穏やかな声に呼ばれ、美咲は施術室へ入った。

神木はいつもの落ち着いた笑みを浮かべ、彼女の顔をじっと見つめた。

「今日はどうでしょうか？」

美咲は唇を何度も湿らせ、指を強く握りしめた。

声が震える。

「……前回の治療は、先生としては……
続けた方が良いと思われませんか？」

神木はわずかに目を細め、静かに微笑んだ。

「蜜穴治療は、前回経験されたように、
施術者との身体接触を含みます。

その点は、すでにご存じのはずです。

ご家族の同意はともかく、
佐伯さんご自身は、それで大丈夫なのでしょうか？」

美咲の心臓が激しく鳴った。

神木は穏やかな口調のまま、

しかし容赦なく追い詰めていく。

「当院は、患者様ご自身の明確な意思がない限り、強制的な治療は行いません。

これは治療方針ですので……

佐伯さんが『続けたい』とはっきりおっしゃらない限り、私はこれ以上進めることはできないんですよ？」

美咲は目を伏せ、唇を震わせた。

夫の顔が脳裏に浮かぶ。

優しい夫を裏切っているという罪悪感が、胸を抉った。

それでも――

下半身はすでに熱を持ち、
秘部がひくひくと疼いていた。

長い沈黙の後。

美咲は、か細く震える声で言った。